

本文

三番

左 持 夜興

我笠わがに月夜忘るかな夜興哉

右

いづれ狸得失さま覚て犬もなし 文鱗

ひだりの句、茂みふかく分入わけいるかりごと狩人の

形容いぶかしき所有あり。

右の句も、すがたつよく言葉も

たくみにきこえ侍れども、其得失その、

我もわきがたし。仍以持よつももつてトス。

現代語訳

左 持(引き分け) 夜興

我が笠が月の光を遮って、皎々と冬の山間を照らす月夜であることを忘れてしまった、いかにも獲物を待つて茂みにじつと身を潜めている夜興らしいではないか。

* 「夜興」は、「夜興引」ともいい、冬十月の季題。『毛吹草』「誹諧四季之詞」にあるように、俳諧において詠まれるようになった季題である。冬の夜、獵師が犬を引いて山に入り、狸・狐などの獣を捕ることをいう。時代は下るが『類從名物考』によれば、近畿地方の方言といい、また享保二年に出た『書言字考節用集』には「獵師ノ用いる所」と注があるので、獵師言葉が一般化したものとしてよいであろう。「夜興」の題では、狩に伴った犬や獵師の狩りをする体を詠むことが多い。求め得た例は、寛文末から延宝期のもものが中心であるが、それらは、狩に伴う犬の様子を詠んだ句が多い。

冬山の眠やおこす夜興のいぬ 高瀧以仙

狩人や罪もむくいぬ夜興引 藤田清俊

夜興の犬やふるきをたつねて狸穴 吉田聞也(延宝2)『桜川』冬2「夜興引」

夜興／夜興ひく盗人犬や龍田山 其角 (延宝9)『東日記』坤「冬の部」

犬引ひいて豆つ腐ふ狩得たり里夜興 其角 (天和3)『虚栗』上冬

『虚栗』所収、其角の句は、犬を連れて豆腐を買ったことをことさら夜興めかして言い立てた趣向である。また、「よこ引や山又山に山めぐり 政氏」(延宝7)『詞林金玉集』一四)のように、狩人が山を廻るさまを詠んだ句も散見されるが、中でも次の二句は左句の趣向と関係が深い。

三ヶ月に思ひまどろむ夜興哉 拳白(貞享2)『ひとつ星』

横引夜興の背子勢にも立か今日の月 紫道(元文2)『ひとつ餅』

明け方に出る下弦の三日月に、思わず眠りを催すと詠んだ拳白の句、『続の原』よりもずいぶん後の例ではあるが、月を勢子(鳥獣を狩り出し、縄や板などをもつ

て射手の方へ追い込む者」とみる紫道の例など、夜興に月を詠む趣向は、「夜興」の詠み方の一つとして自然な着想であったのである。そういえば、去来が芭蕉は夜興引について知らないだろうと勘違いして、狩の獲物となる猪が戻ってくるのを待つ夜興のことを芭蕉に説明したというエピソードが『去来抄』に載っているが、その句も「猪のねに行かたや明の月 去来」という月を取り合わせた句であった。

* この句、「夜興」と「月」との取り合わせは、右に見たように自然な着想であるが、一句はそれを自分の笠が頭上を覆っていて、月夜であることを忘れていたとして、新しい作意を月との関係に見出そうとした詠であろう。芭蕉の「命なりわづかの笠の下涼み」(延宝4『江戸広小路』)の句があることを思えば、我が顔の部分ばかりは月が射し来ず、闇にいとまでは、言えよう。しかし、冬の月は、木の葉も落ち尽くした山を皎々と明るく照らし出している(『和歌題林抄』)。それを笠を被っているゆえに「月夜」だと忘れていたとは、巧みすぎた詠ということにならう。

右

いったいどの狸が得たろうかと、その得失に夢中になった狩からふと我に返してみると、狸どころか、連れてきた大切な犬さえどこにも居なくなってしまったことだ。

* 「いづれ」とは、例えば「いづれうは葉下菝の露あらし哉 周桂」(『発句帳』)のように、複数の中から一つを選択する文脈において用いられる。したがって「いづれ狸」とは、どの狸を捕ろうかと得失に夢中になっている様を言ったものと解せよう。その得失に夢中になった狩から覚めてみれば、犬もどこにもいない、というのである。なお、「犬」と「狸」は、例えば「犬たでやかみつく膳の狸汁 徳元」(『塵塚俳諧集』)、あるいは時代が下るが「犬にとられし狸わりなき 銀獅」(『羽織着て』五十韻『新雑談集』)と詠まれるように、犬が追い立てて狸を捕る狩の様子を自ずから表している。こども、獺の「犬」と「狸」を詠んだところが、題「夜興」を廻して詠む形になっている。

「犬もなし」の「もなし」については、山根清隆氏に連歌の用例についての詳細な分析がある(『心敬の表現論 桜楓社、昭58』)。俳諧においての「もなし」は連歌と同列には扱えないが、思い入れの深さを読者に喚起する「もなし」の機能は受け継がれている。単なる否定ではなく、そこに当然ことながらあるべき「犬」がないということへの啞然とする思いと、犬をそこそこに探す目とが利いているのである。

なお、この「得失」を、「狸」は得たが「犬」をなくした意と解する見方もある。大内初夫氏は、「狸の出でくるのを待っているうちについて寝入ってしまった。目覚めてみると連れていた犬がいない」と解釈されている(『新日本古典文学大系』元禄俳諧集『脚注』)。左句と状況を合わせた解釈であるが、「いづれ狸得失／覚めて……」と、中七を割っての解釈となり、無理がある。「得失」は、すでに見てきたように、狸を追って夢中になっている獺師の様子を言いつつたものと解しておく。

(判詞)

左の句、茂み深く分け入って身を潜める狩人のありさまが読み取れるが、その描写に不審な点がある。右の句も、句の姿は強く、言葉も巧みに用いているが、「得失」がよく分らない。まさに「いづれ……得失」、左右どちらが優れ、どちらが劣るとも分けがたい。よって、持とする。

*

左句の世界を、笠を被った獵師が、茂みの中に深く入り込んで獲物を待つ様子を描いたものとして芭蕉は理解している。おそらく「我笠に月夜忘るる」という言い方に、内にじつと籠もった感覚があり、それが、茂みに深く潜む獵師を芭蕉に思い描かせたのであろう。一句の読みに際して、どういう状況でその言葉が発せられたのかを考え、その表現をリアルにイメージしてゆく芭蕉の読み方がよく示されている句評だと言えよう。

「いぶかしき所」とは、ここでは、狩人の姿について訝しいといっていることになる。大内初夫氏は、その点を「自分のかぶった笠に月夜を忘るる」というと大きな笠をかぶっている感じがあり、茂みに分け入る夜興引から考えておかし(前引『元禄俳諧集』脚注)と解説する。だが、笠の大きさを訝しいといっているとは解するよりも、「月夜忘るる」という表現を訝しいと言っているのではないか。つまり、笠で月夜だということと忘れるということは、辺りを明るく照らしているように見えないということと、そんな暗い藪の中に身を潜めては、獣も見えないのではないか、というのではなからうか。句の注にも示したように、冬の月は辺りを皓々と照らし出す。「月夜忘るる」はその本意をも外してしまう巧みすぎた表現だった。

右句の評言「すがた強く」は、夜興の様子を直接ありありと詠んでいることをいい、また、「言葉もたくみに」とは、「もなし」の長高さ、「いづれ……」というインパクトを評価している。すでに句注で示したように、「いづれ」は連歌以来の常套的な措辞であり、また二者の比較も基本的な詠み方の一つではあった。「もなし」が連歌で多用された切字であることも、論を俟たない。それを、「いづれ……」と強く言い出し、また、「夜興」の題を廻して、直接それと詠み込まずに表現した巧みさを賞したのである。ただし、右句については、「……侍れども、其得失我もわきがたし」と述べていて、評価すべき点はあるものの、難点もある、と言っている。「其得失我もわきがたし」とは、句中の「得失覚めて」の「得失」が、どういう得失なのか、読者にはっきり伝わってこないことを指摘しての言辞だろう。

「其得失我もわきがたし」はまた、左右両句の優劣が付けがたいことを、右句の言葉を用いて洒落た表現でもある。互いに、それぞれ見るべき点はあるが、不審の点、今ひとつの点があるという。左は、自分の笠によって月夜であることを忘れたという表現に、茂みに深く身を潜めたありさまの表現として納得できないという。右は、「得失覚めて」の意味がとりにくいところが難点であったろう。結局、「持」すなわち勝負なし、ということになったのである。